

なぜ？スピリチュアル

終末医療 心の痛みをケア

背景にした緩和ケア病棟として1993年に認可された。ベッド数は27床で、現在約20人が入院している。

ビハラーは、サンスクリット語で「僧院」「休息の場所」という意味。キリスト教に深くかわるホスピス活動に代わる仏

最近、話題になる「スピリチュアル」は、「オーラ」や「前世」など霊的なニュアンスに矮小化されている場合が多い。しかし、本来の、目に見えないものとのつながりを意味する「スピリチュアル」の範囲は広い。

約10年前、世界保健機関(WHO)では、従来の「健康」の定義である肉体的、精神的、社会的に幸福な状態に、人間の尊厳に必要な「スピリチュアル」の要素を盛り込むべきという議論が行われたこともある。

そして、終末医療の現場では、「スピリチュアルケア」が注目されている。身体的な痛みではなく、「生きる意味はあるのか」など、科学では対処できない「心の痛み」を癒やそうという取り組みだ。

新潟県長岡市の長岡西病院にある「ビハラー病棟」。仏教を



患者の話をじっくり聞き、苦痛に寄り添いたいと、森田さん(左)(新潟県の長岡西病院で)

「生きる意味とは……」寄り添って

教の言葉として提唱された。病棟内の仏堂では朝と夕、15人の超宗派の僧侶(ビハラー僧)が、交代でお経をあげる。患者の信仰、宗教は問わず、自由に参加できる。

僧侶の森田敬史さん(31)は、今年3月から常勤になった。大阪大学大学院でスピリチュアルケアについて学び、毎日、病室を回って患者や家族の話し相手を務めている。

「今日も暑いですね。ご飯は食べましたか」と、森田さんが優しく語りかけるのは、80歳の女性。日ごろ誰とでも気さくに話す人が、このところ落ち込んでいる。この数か月で、同じ病棟の友人が相次いで亡くなったからだ。一時期、病室に閉じこもり、ほとんど口を利かなくなっていた。

「仏教でいつ『生老病死』の四苦を取り除くことはできない。しかし、苦痛に寄り添うことはできないかと考え、相手の立場にたって話を聞いている」と森田さん。

医師で武蔵野大学教授の種村健一朗さん(緩和医療学)によると、苦痛には、「身体的苦痛」、死の恐怖などの「心理的苦痛」、地位や収入を失うなどの「社会的苦痛」のほかに、「スピリチュアルな苦痛」があるという。「なぜこんな病気になったのか、生きる意味があるのかなど、生きているうえで根源的な痛みを和らげるには、苦痛に共感し、傾聴することが求められている」と話す。

こうしたケアは、終末医療だけでなく、事故や事件の被害者家族、いじめで苦しむ子どもなど様々な分野で必要とされている。今年9月には、大学教員や宗教家、医療関係者などによる「日本スピリチュアルケア学会」の設立大会が開催される予定だ。

物質的な豊かさだけでは、心は満たされない。目に見えないものとのつながりを、冷静に見つめることも求められている。(竹之内知宣)(おわり)